此間の停車場は吉田、小坂井、牛久保、豊川、一宮、東上、新城、川路、長篠。

豐川稻荷　豐川驛より下車す。豐川町はこの稻荷より繁華に赴きし町にて人口二千餘あり。稻荷のある寺を妙殿寺といひ、嘉吉元年の開殿なり。殿宇宏壯にして門前長く店舗をつらねたり。賽日には參詣者陸續として踵を接し、汽車は爲めに臨時を發るに至る。蓋しこの地方に於ける風指の流行神なり。

砥鹿神社　は一の宮にあり。

東上驛附近に牛の瀧あり、高さ六十餘丈、壯觀なり。

新城町　は南殿樂郡役所の所在地にして、此地方の中心を爲せり。豐川の上流に櫻淵と稱せる櫻花の名所あり。

川路驛附近に、長篠役に織田信長が本陣を有せし茶臼山あり。長篠町より十町餘、か、の有名なる長篠古戰場あり。今の岩城附近は即ち其地なりといふ。地に馬塚美濃、鳥居强右工門等の墳墓あり。風霜百年、轉た昔年を追想するに足る。

鳳來寺　南設樂郡の東北、鳳來寺山の半腹に位し、豐橋より九里餘と稱す。この寺は推古天皇の勅願により、僧利修の開創にかゝり、爾後文武天皇の御宇大寶年間に造立せしめ給ひたる所にして、天台眞言の二宗を兼修し、三河第一の靈場なり。寺域一萬九千餘坪本堂開基堂常行堂三層堂、鏡堂鐘樓等

を始め、數多の堂宇、山間に點在し、就中開基堂は飛驒匠の造營せし所なりといふ。東照廟は諸堂の上方にあり、殿宇最も壯麗にして一山の偉觀を極む。山中奇勝に富むこと非常に多く、隱し水、尼行道、猿橋等の諸勝あり、皆さまゝの物語を有せり。妙法瀧あり。兩崕磊塊天工の妙を盡し、飛瀑其間に懸りて、殊に點綴の宜しきを得たり。遠州の秋葉神社と共に、旅客の必ず行きて訪ふべきところと爲す。ことに汽車長篠に達し、その間纔かに一里廿町を隔てたるのみなるをや。

渥美半島　三河の南部長く海中に突出して伊勢志摩の山影と接し、こゝに伊勢灣を包める半島と、渥美半島と言ふ。此半島見るべきものまた尠からず。先づ豐橋より南に志せば五里餘にして田原町あり。山影海光と相映じ頗る風情ある町なり。豐川河口より此町に通へる小蒸汽あり。町に渡邊華山の墓あり。これより三里餘、松並木と丘陵との間を行けば、宇津江

阪に至る。此阪の眺望は頗る佳にして、眼下に衣が浦の烟波を下瞰し遙かに海を隔てゝ伊勢の諸山のさながら染むるがごとくなるを見る。眺望の快盖し言ふべからざるものなり。これを下りて、左は海右は山の間を行けば、漁村錯落として顯はれ、漁網高く夕日にかゝり、風光畫くがごとし。畠村、今町制を布きて福●江●といふ。衣が浦の水長く灣入して風情なる入江を爲し、人家これに臨みて連る。漢詩に謂ふ所の江村とはかゝる所ならんと思はる。芭蕉が門人たりし杜國の墓は其町にあり。これより一路坦として伊良湖に通じ、松聲濤聲次第に俗塵を脱却するを覺ゆ。

伊良湖岬は此の半島の絶端にして、其岬の盡頭を小山といふ。伊良湖の名は萬葉集に既にこれを載せ、昔は一箇海中の島嶼なりしものなるが、地形隆起の理により、遂に半島と相通ずるに至りしなりとか。今日猶その海水の通じたりと覺しき跡殘りて、其間を太平洋より來れる千鳥は群を爲し

て伊勢灣へと越え行くなり。伊良湖の人家は伊良湖明神社を有する一丘陵の西面に位し漁家蜑戸相連り、それより下れる路は伊勢灣の沙濱へと出づ。人家を南に貫きて、更に小山の凹所を越ゆれば、太平洋の怒濤地を捲いて來り、浩蕩渺茫の邊、先づ神島の青螺を認め遙かに伊勢より志摩にかけたる一帶の山影を指點し得べし。其青一髮の東に盡くる處は志摩の大王崎の鼻にして、其少し西に夜は安乘岬の燈臺の火を認むべし。この太平洋の海岸を戀路ヶ浦といふ。その浦を右に傳へば十町餘にして牛ヶ首の巨巖あり。其ほとりに二大石門ありて、風光頗る雄渾なり。この邊、三四十年前までは海獺多く集ひしといふ。かくてこの鼻をめくれば、日出の海岸に出づ。此の海岸より半島の東側の海岸弓弦のごとく灣曲し、其間に漁村相連り、上に越戸の大山の白雲を載きて立てるを見る。この大山の山腹に寺あり。山頂に立てば、太平洋と伊勢内海との風光一々目睫の間に集りて、其

美名狀すべからざるものあり。

この伊良湖岬に遊ぶには、東海鐵道の豐橋にて下車し、停車場前より牟呂まで人力車を備ひ、同所より汽船(和船便もあり。月夜を選びてこれに乘れば、清興忘るべからざるものあり)と唱くにて海路十里、畠村に至る。これより伊良湖まで二里十町、徒歩するも亦おもしろし。車もまた有り。

伊良湖には旅館なし。網元に、小久保惣三郎といふ人あり。遊客は其人をたよりて行けば、萬事親切に世話して呉れるべし。著者も其家に一週間ほど居りたることあり。

此地に磯丸といふ漁師の歌人あり。其名四海に聞え、靈元上皇より御賞詞あり たること書に記せり。其歌にもまたすぐれたるもの少なからず。

芭蕉が「鷹一つ見つけてうれしい伊良湖岬」の句は、伊良湖村の中央に石に刻してあり。

風雪の美しきと波濤の雄壯なるとは此地の特色なり。殊に、伊勢内海と太平洋との間、伊勢志摩の山嶽の環のごとくなるを見る、實に絶景なり。盆し東海道海岸に於ては、富士山下の風光と相桔抗して敢て下らざるべきか。

伊良湖岬の海上一里餘の處に神島の一島あり。其間を伊良湖渡合と言ひ、海深甚だ大に波濤また險惡なり。行政區劃上にては伊勢國に屬すれど、伊良湖よりする方寧ろ近し。此島漁戸二百戸ばかりあり。別天地にして

風光甚だ佳なり。島の東南端に奇岩窟あり。怒濤澎湃、壯觀を極む。伊良湖よりこの島に渡る便船は絶えざれば、こゝを渡りて更に答志島に行き、それより伊勢志摩の海岸に赴くもまた面白かるべし。傳へ言ふ、往昔の東國交通路は伊勢の神社港より此の伊良湖をわたり、渥美半島の東海岸を過ぎて以て駿遠の地に赴きたるものゝ如しと。其眞僞を知らざれども、かの北畠親房が義良親王を奉じて奥羽に赴かんとせし舟路を此に取りたるを見れば、或は事實なりしやも知れずと思はるゝなり。衣ケ浦の一島篠島は義良親王の其際大風に逢ひて上陸したまひし處今日猶その遺蹟を存せり。兎に角に、この三河の渥美半島は旅行家の必ず一遊すべき所なるべし。

更に豐橋に戻り、再び東海道に添ひて旅行を續くるとせんに、豐橋の西二里に、前芝海水浴あり。旅亭に豐海亭あり。

御油町は御油停車場より二十町北にあり。停車場より十二町の地に新

宮寺山あり。此附近有名の眺望臺あり。又御馬村に海水浴あり。かくて汽車は次第に海岸に近く、遂に衣ケ浦の深碧なる波濤は來て車窓の前に開く。この一帶の風光は東海道中稀に見るの好景にして、一たび此線路を過ぎたるものゝ皆な忘るゝ能はざるところなり。前に竹島、大島、小島、姫島等の島嶼星散羅列し、其間を白帆點々として藍碧なる海波と掩映し、其の彼方に渥美半島の小山脈に白雲の搖曳せるを見る。眞に畫もまた若かざるの趣あり。この好風光に對して蒲郡の海水浴あり。蒲郡の停車場より其海水浴場見ゆ。

旅館健碧館、海老屋、角市、海月樓等あり。宿料五十錢より一圓まで。冬季は海水温浴あり。

海上の竹島、大島、小島、佛島等皆舟にて歴遊すべし。

龜岩には海水浴場あり。旅亭を龜岩亭といふ。

蒲郡を過ぎて又海を離れ、頃刻にして德川家康の誕生地●岡崎町●に至る。

町と停車場との距離一里以上なり。

停車場前に志貴の屋、清風軒、鍵屋等の旅店あり。

●岡崎町●は西參河唯一の都邑にして、人口一萬七千を有せり。矢矧川其西を流るゝを以て、水運の便多し。昔時其旺富參河に冠たりし時に比すれば稍〻衰微の趣あれど猶一大名邑たるの資格を失はず。舊城址は康生町にありて矢矧川に臨み、眺望甚だ佳なり。今開いて公園と爲せり。東照宮祠及び家康産湯の井等あり。又、大樹寺、圓福寺、新光明寺等あり。德川氏創業時代の遺蹟を知らんと欲するものは必ず此地を一訪せざるべからず。

名物に八丁味噌松茸鑵詰等あり。

汽車は次第に東海道を離れ、安城、刈谷、大府に停車場を置きて大高に至り、こゝは再び東海道に合す。この間、東海道に知立(池鯉鮒)あり。

●町(地に仲哀天皇元年の創建と稱せられたる知立神社あり。又伊勢物語に唐衣の名歌を殘したる八橋の名稱も此處より一里、半橋村にあり)有●松●町(有松絞と稱す

る木綿絞を産するを以て有名なり）あり。地は既に尾張國に屬せり。

桶狭間古戦場は有松町と落合村との間の國道の南に入る二三町の處にあり。

汽車よりすれば大府驛より下車し、北方一里ばかり丘陵の間を辿らざるべからず。

海道の勇將今川義元が織田信長の夜襲に逢ひて戰死したるは實に此地にして、

永祿三年五月十九日なり。今や寒畑荒草徒に狐狸の窟伏するところとなれり。

地に一古碑あり、題して「今川上總介義元戰死之地」といふ。其附近に部下六十餘

士の墳墓あり。遊客懸吊せば、感慨とどまるべからざるものあらん。

鳴海町も五十三次の一驛なり。有松絞を鬻ぐ家多し。

（八）知多半島

龜崎町——半田町——武豐町——野間の大師堂寺——大野海水浴

尾張の知多半島は三河の渥美半島と相並んで伊勢灣に突出せるものにして、其廣袤、また相似たり。されど、農商工業發達の點に至りては、渥美半島殆ど知多半島の脚下にだも及ぶべからず。知多半島に入るものは、丘陵といへる丘陵は開かされ、田野といへる田野は耕され交通の便また頗る自由

に、到る處大なる都會と港の多きを見て、其の繁華の遍きと住民の活氣に富めるとに驚くなるべし。これ一は名古屋市の如き大都會を其附近に有するに由るべしと雖も、其沿岸良港に富み昔より東西交通の要衝に當りたることまた其一因ならずとせず。

この半島の交通線を擧れば官線武豐線は東海道線大府驛より岐れて、緒川龜崎半田を經て武豐に至り、水路は半島の絶端師崎より志摩の鳥羽、三河の蒲郡に至れるものと、福江、篠島、内海、野間常滑大野を經て熱田に至るものとの二あり。其他武豐港半田港、龜崎港には船舶輻湊し、帆檣常に林立せり。

ことに半田港は横濱神戸間を往復する郵船の寄港地として有名なり。

大府驛より武豐線に轉乘すれば、忽ちにして龜崎町に着せん。町は境川の河口にあり。古來有名なる港津なれど、河口泥沙堆を爲して今は大船を繫ぐに足らず、港としての繁華大に減退せり。されど此地は有名なる釀酒

地なるを以て富豪多く、市街また整正なり。望州樓といふ旅店は町の第一流の旅店なり。丘陵に凭りて構へたる大なる家なり。其他加賀屋、森口屋等あり。

牛田町はこの次驛なり。海底深く巨船を入るゝに足るを以て港頭常に帆檣の林立するを見る。蓋し知多灣に於ける第一の良港なり。人口九千。

雁宿山は明治二十三年海陸軍大演習の行はれし時、大元帥陛下の御駐蹕あらせられし地なり。停車場より十町、東に衣ヶ浦を望み、風景の明媚狀すべからず。此地にては魚賓婦をシヤリコといひ、來れといふをイジヤといひそんなといふことをソゲナといふ。

名物、牛田饅頭、富士の雪。

旅店は新文亭、餅文樓、三升屋、加登屋。

成岩町は牛田の南牛里にあり。地に天明年間創建の常樂寺あり。この地一帶は古來酒、醉、醬、油の産出に名高く、殊に酒は知多清酒として灘五郷に亞ぐと稱せらる。維新後、麥酒また此地に釀造せられ、有名なるカブトビールの釀造所丸三麥酒會社は牛田町にあり。

武豐町は武豐線の終端驛にして、維新前は全く海岸の一漁村たりしもの、良港の地形を備へたるが爲め、今は此海岸有數の繁華の地となれり。停車

場は海岸に近く、百間餘の棧橋ありて荷物運搬の便に供せり。

觀兵塞は町の西、長尾山にあり。明治廿三年海陸大演習の際大元帥陛下の登臨あらせられし所、山の中段に風翔閣と稱する御休憩所今猶存せり。夏時は遊客多し。

旅店は川久、鳴戸屋。

これより半島の勝地を記せば野間の大師堂寺は武豐停車場を距ること西南大凡四里、野間村大字野間にあり。寺記の記する處に依れば承曆年間、白河天皇の勅願によりて建立せしものなりといふ。されど此寺の殊に名高きは、源義朝が長田忠致に弑せられし浴室の古蹟なるを以てにして、その弑殺せられし古蹟今猶當寺の東方字田上に存し、俗に地名を御湯殿と唱へ法山寺と稱する禪刹あり。又當時義朝の首を洗ひたる池は當寺の門前にある小池にして、其遺恨池中にとゞまり、國家に凶事あれば池水必ず濁るといひ、世に血の池と稱せり。建久元年源頼朝天下を一統して後、先考の菩提

を吊はんが爲め大に土工を起し、七堂伽藍を建築し、怨敵長田忠致父子を縛して、義朝の墓前に曳出て之を磔殺す。今東南の山を長田山と稱するは、この遺骸を埋葬したる者にしてなりといふ。寺域千九百餘坪、本堂鐘樓、樓門客殿等相連り、壯麗偉大を極めたり。源義朝の墓は本堂の東にあり。義朝の長田忠致に弑せらるゝやせめて木刀にてもありしならばと切齒せしを以て里民瘧を憂ふるもの木刀を捧げてこれを祈る時は必ず驗ありと言ひ傳ふ。これを以てその捧げし木刀今墓前に堆積せり。其他、野間村附近に義朝に關する古蹟多く、一々記するに堪へず。

師崎海水浴　知多半島の極南端にありて、武豐停車場を去ること四里半、巉岩突として海上に突出し、怒濤の相呑吐せる、また奇觀なり。海水浴旅館二三あり。

最もすぐれたるを養春館といふ。汽船の便あり。

篠島　師崎の東南に横はれる島なり。後村上天皇が皇子たりし時、北畠親房と共に東奥に赴かんとして船大風に遂ひて漂着したるは此島にして、今日猶其遺蹟を存せり。人家は島の北側にありて南風を保障し、海水浴場として甚だ佳なり。又旅店の設備も完全せるを以て、名古屋より行いて遊ぶもの多く、割合に紳士風なり。汽船は毎日師崎、半田、龜崎に通じ。風景の美なるは、いふまでもなし。

半島の西岸にも遊ぶべき所多し。就中有名なるは大野海水浴なり。明治十四年、同地の海音寺の住職が、土地の有志者と謀りて浴場を設け、醫士をして海水を分析せしめしに、水質は氣管支病、神經病、皮膚病、胃弱等には特効ありと定められたるより、其名俄かに顯れ、相州大磯と匹敵する浴場となれり。されど海水は稍々濁れり。風景は伊勢の海を隔てゝ、四日市と相對し、風光明媚なり。

旅店には海濱館、恩波樓、和泉屋、信濃屋、石州屋、壘屋、加見屋、越後屋等ありて、何れも宿泊料は八十錢以上を普通とす。此地に至るには武豐線半田驛に

て下車し、西方三里許を人力車にて行くべし。此賃錢六十錢位なり。大高驛にて下車すれば、陸路五里に達す。車賃一圓位とす。又熱田よりは鳥羽に至る汽船ありて、途中大野に寄港す。汽船賃下等十五錢にて一時間位にて達すべし。

(九) 名古屋市と其附近

熱田神宮——名古屋市——名古屋城——名古屋巡覽——近郊の諸勝——小牧山——犬山町

大高驛より汽車はまた國道と近く、遂に前に熱田神宮の儼然たる林影を見る。

熱田町は宮の名を以て世に知らる。東海道は昔は此地より舟にて伊勢の桑名に渡りたるものにて、此間を七里の渡といへり。されば昔にありては旅客皆此處に集り、名古屋にも劣らざる繁榮を保ちしなり。今は却つてさひしくして、此地は今日名古屋にも劣らざる繁榮を保ちしなり。今は其の繁華を名古屋市に收められて、昔の如き繁榮を見ずと雖も、二百萬圓の經費を投じて築港工事を完成し、名古屋に於けること、恰も横濱の

東京に於けるごとくならんとせり。されば今後は更に隆盛に赴くべく、伊勢内海の諸港より紀州沿海を經て大阪地方に往復する汽船の發着あるが爲め更に交通上主要の地となるべし。且つ名古屋市を始め、美濃信濃地方の山地に供給する魚鹽はいつれも此地を經由するを以て、木の芽浦に大なる魚市場あり。戸數五千人口二萬を算す。

熱田神宮は尾張國中第一の名祠にして、其境域は町の北旗屋町にあり。日本武尊を主とし、天照大神素盞嗚尊宮讀姫命建稻種命を合祀し、別にかの三種神寶の一たる草薙劍を祭祀して神體と爲せり。境内老杉攢として鬱えて古松これに點綴し、人をして先づ神威の高きを思はしむ。社殿は正殿の外に渡殿釣殿祭文殿迴廊等ありて建築甚だ宏壯を極めたり。境の西に神苑あり、奇岩清泉の配置頗る瀟洒に、杖を曳くもの多し。蓋し伊勢大廟に次ぎて本邦屈指の官幣大社の一なり。又白鳥の陵は字白鳥町、法持寺の後に丘上老樹多し。

旅店には岡田屋、伊勢屋、大森竹屋、紀伊國屋、桔梗屋、神戸屋、富士林等あり。いづれ

も汽船宿をかれ、泊料八十錢位なり。此地よりの汽船の航路は鳥羽行(大野、四日市、津、鳥羽に寄港し、それより紀州の各港に寄港しつゝ大阪に至る)あり。此町の附近の古蹟には仲哀天皇を祀れる高座神社(停車場より八町)笠寺觀音(全一里)八丁縄手(全十八町)等あり。

熱田驛を距れば旅客は既に其前に名古屋の大市の美しく廣げられたるを見ん。東海道と鐵道とは此處に至りて全く離れ、更に美濃地方に赴くの一路を起す。

名古屋市

名古屋市はもと親藩德川氏の城邑にして、殷盛三府に亞ぎ、世人呼んで中京と稱す。地尾張の南方の平地に位し、海陸交通の利便を共有し、南に海を控へて漁鹽の利を收め、西北地味肥沃にして農産物饒多たる地を負ひて一市の富源をなし、七賓を始め漆器、陶器等の美術工藝品に特殊なる製産物を出して妙技を世に誇り、信濃、美濃、三河、伊勢等の諸國を四方に有して之れが中心地となり、商工業の隆昌、東京、大阪を除き他に比類少なかるべし。殊に

三百年間大藩の城下として士民逸を貪りて富を縱まにせし結果として、驕奢の習俗を成し趣味風韻を喜ぶの意向を馴致したるとて、今に於ても市人は概して美術裝飾に眼識あり、聲樂茶花の雅技に堪能なる者多きことは、亦京都以外他に多く見るべからざる此の市の特色なるべし。市の廣袤は東西一里十五町、南北一里十五町、周圍六里十七町にして、此の域内に市坊の數二百九十一あり。戸數六萬六千、人口二十七萬四千を包容す。尚ほ市部接續の郡村市街地を加ふれば、實に人口三十二萬の上に出づべしといふ。而して爾く多數の市民が恒に出入するの門戸となり、幾多の商工業者若しくは觀光の旅客が他國より往來するの關門たるべき名古屋停車場は、市の西端笹島の地にあり。東海道線は南熱田より來り此處を過りて北進し、中央鐵道西線は此處より岐れて市の東を經て中津川方面に走り、關西鐵道はまた此の地を起點として西の方伊勢に入る。されば西より來る客も東よ

り到る人も、北よりせしものも、皆共に此の一地に集中すべければ、客の乘降、貨物の輻輳最も繁く、實に新橋・梅田に亞ぐの大驛たり。停車場前より市を東西に一直線に貫きて東端中央線の千種停車場に到る大道あり、新柳町・榮町の通りは是れなり。曾て吉田祿在氏が區長たる際に幾多の反抗に逆ひ、一大斷行を以て築造したる道幅の廣濶なる街路にして俗に廣小路と稱し兩側には大建築物軒簷相接して列りて市の壯觀を爲し街上には電氣鐵道を通じて市内の交通に便し最要路と推さる。之れに對して又熱田より來りて市を南北に縱貫して廣小路の街道と交叉し舊城大手門に到る大道あり。謂ゆる本町通り又名古屋街道の名あるものにして尾頭町・古渡町・橘町・門前町・末廣町・鐵砲町・玉屋町・本町は即ち是れなり。今市民が俗に上町・下町と稱するのを名古屋市に於ける二大街路を爲す。以上例に從ひ、廣小路の通路を以て市を二分し、南北に分て市の概略を叙すべし

廣小路通と本町通と相交叉する處に市の里程元標あり。此附近ことに繁華なり。北側に朝日神社、南側に名古屋郵便局あり。これより猶廣小路通を眞直に進めば、街路の中央に日清戰役に於ける第三師團軍人の紀念標あり。砲彈の形を成せり、此の附近に、愛知縣廳、議事堂、名古屋市役所、商業會議所其他大小銀行あり。この通を極むれば千種停車場に達す。

廣小路通を北に曲りて、本町通を進めば、五六町にして、有名なる金の鯱なる名古屋城を見る。

●●●名古屋城は金の鯱を以て其名天下に聞え、三尺の童子も猶よくこれを識る。慶長十五年清洲の城を移したるものにして、設計は全く加藤清正の手に成れりと傳ふ。五層の天主閣は殊に精巧堅牢を極め、土基の下端より五層の棟の上端まで十七間四尺七寸五分、最下の一層は南北十七間東西十五間三尺、壘數五百三十六、最上の第五層は南北七間東西六間、猶壘數百壘敷の廣さを有す。閣上の金の鯱は南を雄とし、北を雌とす。

頭より尾まで各八尺余、これを造るに、慶長小判一萬七千九百七十五兩を要したりといふ。城内の多くは今陸軍省の用地に歸し、二丸三丸邊は皆三師團司令部及び各科の兵營に充てらる。唯本丸の一部、舊藩主常住の殿舎のある所のみ特に宮内省の保管に屬し、二十六年以後、名古屋離宮と定められたり。結搆數寄を盡し、當代建築の極致を窺ふに足ると聞く。

大手門前より廣小路通は市街整正なり。就中、中宮町傳馬町通、京町茶屋町通は東西に通ぜる二大街道路にして、市中富を以てすれば第一の中心點なり。大商人の店舗多く、名屋屋市中には古着商軒をつられたり。京町には藥種商多く、杉町には名古屋控訴院、歩兵隊、中學校、高等女學校等あり。大手門外の外濠町には名古屋控訴院と相隣れり。社殿大ならずと雖も壯麗なり。東照宮は長島町にありて、市の北端に師範學校あり。城の東方の地は往昔の屋敷町にして、長塀町、白壁町、撞木町等の名あり。建中寺は淨土の名刹にして、尾州二代侯の追福の爲めに建てられたるもの、筒井町にあり、これより北十町を隔てい新出來町に五百羅漢あり

廣小路以南の街路に至る街路なり。此方面にて主要なる街路は橋町門前町より末廣町鐵砲町町には雜貨商軒をならべ、其裏通には旅亭料理店多し。橋町、門前町、末廣町は屈指の所なるべし。若宮八幡、本派本願寺別院、七ツ寺、大須觀音、浪越公園等皆此近隣にあり。

若宮八幡宮は末廣町に在りて停車場より凡十六丁なり八幡宮の若宮大鳩鳩尊を祭る天武天皇の御宇の鎮座にして神奥天王社迄神幸あり御行列中山車等座あり例祭は六月十五十六兩日にして行裝又尋常の神事にあらず境内には背松ありて東照宮に劣らざる大祭にして行裝又尋常の神事にあらず境内には背松緑樹鬱蒼として所々に休憩所茶店及料理店等あり。

七つ寺は門前町に在り、停車場より凡十五丁なり、稻園山正覺院長福寺と云ふ、陰長十六年中島郡七ツ寺村より移す、天平七年行基菩薩の開基にして、平重盛等の歸依ありし寺なり。佛像經典等に得難き珍寶を藏し、今、國寶となれるもの多し。

大須觀音は東京の淺草、大阪の千日前とも稱すべき地にして、市中第一の熱鬧地として有名なり。眞言宗にして名を北野山眞福寺といふ。されど大須觀音の名ことに世上に知らる。停車場より凡十五丁なり。慶長

十七年家康の命により中島郡大須の庄北野村より此地に移す。能信上人の開基たり。後村上天皇の御宇以後世々の天皇御歸依あらせ玉ひ、旺盛なる堂宇なりしに惜い哉明治廿五年三月本堂及五重塔仁王門其他の建物悉く燒失せり。因て目下再建中なり。境内附近の各小路には劇場、飲食店等隙間なく立ち並び、其喧囂雜沓晝夜の區別なく、市井の繁華一にこの一小區に集められたるがごとき思を爲す。北隣に公園あり。境狹小なれども泉石の趣なきにあらず。大須觀音の二王門を門前町に出づれば、東側に愛知博物館あり。

此附近寺院多し。

名古屋市第一の大伽藍たる大谷派本願寺別院は下茶屋町にあり。堂宇宏壯にして、規模また此附近に冠たり。

堀川の流は狹小なる一溝渠に過ぎざれども、船舶の出入多く最も交通の便あり。

批把島町は青物市の盛なるを以て有名なり。

名古屋市の旅館は多波良、松宗、山田屋、春風樓(榮町)九文(上園町)しな忠(富澤町)鶴鳴館、明治館(門前町)名古屋ホテル(堅三藏町)等あり。停車場前にも旅店多く、信忠支店河内屋支店等あり。料理店としては東陽館、得月樓、河文、魚半等あり。

物産には七寶燒、一閑張、漆器、陶器、袴地等あり。

東海道線は笹島町に停車場を置きたるが、これより美濃を經て信濃に入らんとする中央線は直ちに北を指し、市の東部に千種停車場を置けり。市中を通ずる電車鐵道は、東海線の停車場より、繁華なる廣小路を通じて縣廳前に至り、更に延長して千種停車場に達す。

電車の停留所は笹島、中の町、長島、呉服、久屋、西新、東田、布池車道、千種、泥江、本社前、菊井、押切にて、笹島千種間の賃十錢なり。

市の近郊接濱地に於ける名勝二三をこゝに掲げん。

八事山口停車場の東南二里餘に在り。名古屋市内の瓦甍を望み、東方に呑海峰、吐月峰を扣へ風景よし。熱田町よりは一里半とす。頂上には

弘法大師開基の邊照院あり。又此山の南に廐、茸の名所たる天道山あり。

中村公園　愛知郡織豐村字中村にあり、笹島停車場より凡二十町なり。今は太閤山常泉寺の境地となれり。慶長の頃宅址に創建したる堂宇元祿年中再興造營して今の如くなれり。前庭に秀吉の手植なりと云傳ふ狗骨樹及産湯の井等あり。寺には秀吉手書の神號其他の遺品を藏む。又明治十六年の建造に係る豐國神社其隣地にあり。今、此地を公園と爲し、境内に櫻樹を栽ゑたり。

四觀音　甚日寺村の甚日寺、笠寺村の笠寺、荒子村の觀音寺、志談村の龍泉寺を巡回して、四觀音めぐりといふ。其他此の市中見るべく探るべきもの多し。されどこの小冊子の盡すべきにあらざれば、他は其地にて發行する名古屋案内に讓らん。

名古屋市より北に走れる稻置街道を進めば三里餘にして春日井郡に小

牧町あり。人口四千を有する一小邑なれど、其町の西に有名なる小牧山あり。

小牧山は一に飛車山とも云ふ。田面に孤立して松、檜、竹等繁茂し、翠色滴らんとす。山上に城址あり、徳川家康此山に陣し、豐臣氏をして畏懼の念を起さしめたる所なり、今は徳川侯の所有にして、山内に諸人の入るを禁ぜり。

これより北する三里、犬山町あり、舊城は今尚ほ天主閣以下の城樓壘廓を存し、北に木曾の大河を扣へて、風致自から凡ならざるを見る。町は人口七千を有し、名産として犬山燒と稱する陶器、糸、蒟蒻、忍冬酒等を出す。中山道の街路は町の東北を走りて、木曾川沿岸の驛太田までは幾かに一里餘を距つるに過ぎず。

名古屋市より東北に走れる一路は瀨戸街道と稱し、これに添ひて、官線中央線は美濃地方に向ひ、勝川、高藏寺、多治見、土岐津、端浪釜戸大井を經て中津に至る。陶磁器の製作を以て有名なる瀨戸町はこの沿線

中にあり。人口九千を有し、陶業盛なり。

瀬戸燒其沿革に日く尾張の陶法は、漸く四隣に傳播して美濃に入り美濃燒となり、現今土岐惠那可兒の三郡は其主産地となれり。土岐郡は瀬戸に近く文化年中瀬戸より新製燒法を泉村に傳へて磁器を製せしに創まり、元祿中多治見笠原泉下石に二十四窯を作り、其の後妻木駄知等も之れに加はりて三十五窯となり、窯數次第に増加したれども皆瀬戸燒として諸國に販賣せしを以て美濃燒の名曾つて顯はれざりしが、近來多知見を中心として其の附近の窯業漸次隆盛となり、多治見燒の名漸く世に顯はるゝに至れり。また瀬戸の陶器師にして其の居を轉するもの往々此の地に來り、窯業を營むを以て、益々多治見の窯業は隆盛の有樣を呈し、後進の多治見は前進の瀬戸を凌がんとするに至れり。加之其の製品の如きも模樣清楚にして氣韻高く、且つ其の價低廉なるを以て、能く顧客を引きヨーロッパ・アメリカ・支那南洋諸島に輸出し、製造價額は約百五十萬圓、製造戸數約五千三百餘、製品の多くは實用的にして、裝飾品は百分の三に當る。最も製陶の盛なるは土岐郡駄知下知妻木の三村にして、其他全郡の諸村及惠那可兒諸郡の諸村と共に皆多治見町に集りて此地の製品と合し、多治見燒として四方に輸出す。駄知村の窯業は明治十一年頃を以て始まり、始四周山を以て圍まれ、交通不便にして窯業も亦甚だ振はざりしが其の後道路の修繕交通の便を得し以來、頓に盛大と成り、今日の製造戸數は六百戸に達し、下知妻木と共に肩を並べて本縣中最も製陶業の盛なる地たるに至れり。而して其製品は實用の者を主とし、精巧品は間々之を製するに過ぎず。精巧品の最も盛なるは市倉にして、他村に比して其産額多し。諸村各々業を分ち、酒杯・煎茶腕・珈琲茶腕・徳利等各村特有の製造を成し、一般に美濃燒なる一大特産物として四方に輸出す。製造所の規模は一般に甚だ小にして工場組織のものは獨り多治見の一工場あるのみ。名古屋各市中四浦工場の看板高く店頭に掲げられたるは此の工場にして、一に又多治見燒の名を代表せる如き觀あり。本縣陶業の機關たる陶器學校は土岐郡の土岐津町大字四山に郡費を以て設立せられ、盛に斯道の隆盛を計れり。(大日本地誌による)

瀬戸街道を印場村にて南に折れ、田徑の間を行くこと一里餘にして、地に今猶長湫の村名を存せり。これ即ち天正十二年秀吉の軍の徳川家康に破られたるところ、秀吉の將池田信輝森長可の墓は今猶田疇の間に殘れり。憑吊の價値なきにあらず。

(十) 伊勢參宮

津島―木曾川揖斐川の三角洲―桑名―四日市―菰野温泉―津市―松阪町―辛洲海水浴―山田町―伊勢大廟―二見浦―朝熊山―志摩海岸

伊勢參宮を爲さんとする人は、名古屋市より關西鐵道に轉乘し、龜山驛に至りて津支線に乘替へ、津市より更に參宮鐵道に乘替ゆれば直ちに伊勢山田町に達することを得べし。

關西鐵道は官線と名古屋市に於て連絡を取り、愛知停車場を起點となし、蟹江、彌富、桑名、四日市等の諸驛を經て、漸く伊勢内海の海岸地を離れ、鈴鹿郡の丘陵地を經て龜山に至る。此間概して東海道の道路と相添へり。龜山・津の支線は岐れて南に向ひ、津市に至り參宮街道に合す。名古屋より津までの三等賃金一圓二三十錢なり。關西鐵道の本線は龜山より四に向ひ、關を過ぎて、加太峠に大隧道を穿ち、直ちに伊賀國に入り、柘植(これより近江草津に至る鐵道分岐す)上野、島ケ原、笠置を經て大和國奈良より大阪に至る。

名古屋より奈良迄三等二圓内外大阪まで全二圓五六十錢

參宮鐵道は津市を起點とし、海岸地を南走して松阪町を經て山田町に至る、此賃錢三等七八十錢。

山田町より二見ヶ浦に至る電氣鐵道あり。

先づ名古屋市より關西鐵道に乘じて西南行すれば、渺茫たる水田、稻よく實りて、到る處小河水の縱横せるを見るべし。これ、地質上最近に

發達したる冲積層の地にして、往昔は伊勢海の一部たりしこと恰も東京の東京灣の一部、大阪の大阪灣の一部たりしがごとし。而して此間を流れて伊勢灣に放瀉する大河に木曾川あり、揖斐川あり。ことに木曾川河口の三角洲のごときは年々洪水によりて其形を變じ、其幅の廣くして海のごとくなるは地理學上興味多き地なり。而してこの附近米の產地なることも又それに由るなり。この沖積層地の中心に、津島町あり。佐屋川の東岸に位する尾張西南部の大邑にして人口一萬四千餘を有せり。尾西鐵道あり、關西線の彌富驛より岐れ、佐屋(此地は佐屋めぐりとて、往昔桑名より宮に舟にて渡らざる旅客の往來せし地なり)を過ぐれば其次驛は津島町なり。

津島祭　町の津島神社は有名なる古社にして、素盞嗚尊を祀り、尾張國五社の一なり。古來祭典の盛なるを以て聞ゆ。例祭は毎年舊曆六月十

四日十五日を以てこれを行ひ、天王川に浮べたる數隻の大船に綵花を飾り、錦鏘を加へ、これに一年の日數を象りたる三百六十餘の提燈を點じ大人形をつくり船中鼓笛相和して、地方的特色なる曲を囃し立て、盛んに川中を溯回す。其壯觀たとふるにものなく、遠近來り觀るもの多し。これを以て關西線は臨時滋車を出すを例とす、蓋し本邦祭典中、特色あるものゝ一なり。

彌富驛は人家五六百を有する小村落なれど、尾西鐵道の分岐點なるを以て、將來繁盛に赴くべき形勢あり。この西を流るゝ木曾川は尾張伊勢兩國の界なり。

彌富驛を去りて、渺茫たる木曾川の流先づ人目を驚かすに足る、これに架したる鐵橋は延長二千八百四十八呎(八町餘)の長さを有せり。否それのみならず、これより長島驛を過ぎて猶南すれば、再び三千二百六十二

呎を有する大鐵橋を渡るべし。これ、木曾川が國中の諸川を集て東南流し、香阪の東にて二派に分れたるもゝの一派にして、渺茫殆ど天と相若く。

これを渡り了れば**桑名町**の人家忽ち其前に顯れ來る。

桑名町は舊松平氏十一萬石の城下にして、東海道の要衝たりしと、諸國廻船の船着たりしとを以て、頗る繁盛の趣を呈したりき。今も其繁華甚しく減せず、米穀取引の盛なること本邦屈指の地と稱せらる。木曾河の河口に位せるが爲め、水運の便また甚だ盛なり。

舊城址は大河に沿ひ、市街を下瞰し、風景美なり。桑名の時雨蛤は東海道中の名物中ことに名高かりしもの、今、汽車にも賣りに來るなり。旅館兼料理屋に眺望樓(船津)なり。又旅館に京屋、丸一、鍵屋等あり。

桑名町を出てゝ、汽車は海道に添うて走り富田驛(驛に中學校あり)を過ぎ、直ちに四日市市に達す。

四日市は北伊勢有數の都會にして、近來市制を布けり。三岳川の河口に位し、鐵道は市街の中央を横斷せり。戸數約四千五百、人口約三萬を有し、港灣水深く、陸海交通の連絡便に、特別輸出入港たり。區裁判所、大阪税關出張所、警察署、税務所、市役所、燈臺局、商業會議所、電話交換局等あり。銀行會社數多く、米油株式の取引所もあり。物産には種油、綿布、魚類の罐詰、四日市縞、綿糸、洋紙等あり。陶器の萬古焼は、近來盛大にして元祖なる桑名を凌ぎ、黄楊櫛また其名を三都に知らる。

日本郵船會社の滊船は、横濱より此所まで隔日に一回の航路を開き、大阪商船會社の小滊船は熱田大阪間を往復し、毎日一回此地に寄港す。されば此地より風波靜穏なる伊勢内海を經て、神社港(山田町に二里)より

汽船賃横濱へ一等六圓、二等四圓、三等二圓。熱田へ中等二十五錢、津へ二十錢、神社へ冊五錢、鳥羽へ四十五錢、尾鷲紀州の東部)へ一圓六十五錢、新宮へ二圓三十錢なり。この航路は便利なれど、鳥羽以四は、大海にて風浪險惡なれば、よく〳〵其天候を見定めて乘るべし。九月頃には暴風雨に逢ひてひどき目に逢ふこと往々にしてあり。

旅店は松茂樓、吉高屋、十九村屋、山田屋、東京亭、料理店には八百茂、茂竹庵、佐野屋。遊廓は北町、南町、高砂町の三ケ所にあり。

湯野温泉は此の四方の山中にあり。良温泉なり。

四日市より南する一里餘、追分と稱する地あり。これ、舊東海道と參宮街道と分る所にして、汽車は猶海岸に近く、參宮街道の一驛河原田に至りて西折し、直ちに石薬師驛の西高宮驛に至りて再び東海道と合す、參宮街道は海岸に添ひて神戸、白子、上野の三町を經て津市に達す。此間里程五里餘、道程平坦車を通ず。

東海道を傳へば、驛路に石薬師、庄野の二古驛あり。停車場に河原田加佐登あり。これを過れは龜山驛なり。

亀山町は關西鐵道中の大驛にして湊町(大阪線)と津線との岐るゝ所なり。往時は石川氏六萬石の城邑たりし地、現今、人口七千餘を有し、舊城地は今公園となれり。鈴鹿川は鈴鹿山に源を發し、關町を過ぎて此地に來り、舊城址の下を流れて鐵路に添ふ。水聲潺湲として聞ゆ。而して此附近の古蹟として最も有名なるは、日本武尊の薨去あらせられたる能褒野なり。

能褒野の地位に關しては、種々の說多けれど、鈴鹿郡川崎村大字田村字名越にある御陵を以て眞實と爲すべし。亀山驛より一里餘、加佐登驛よりも一里餘なり。地に、能褒野神社あり、老松古杉鬱として境内を蔽ひ、社殿の結構頗る美なり。御陵は其神社の傍にあり。白鳥の陵といふ。尊の東征の歸途此地に薨じたまひしことは正史明らかにこれを記せり。

亀山より西に向へば頃刻にして鈴鹿嶺下の一名驛關町に達せん。されどこの條は伊勢參宮を目的としたれば、其の案内は後に讓りを、直ちに津行の支線に轉乘することと爲さん。汽車はかくて小丘陵の起伏し、小

溪流の潺湲として流るゝ間を次第に海岸の平地へ出づ。下の庄驛はこの小丘陵中の一停車場なり。

此の海岸の平地に出でゝ、先づ一身田の一驛を得べし。而して旅客は此の停車場に近くに當りて、一大伽藍の高く田舍町の瓦甍の上に聳えたるを見るべし。これ即ち有名なる高田派本願寺の本山專修寺の巨刹なり。

專修寺は後堀河天皇の勅願所にして、眞宗第十二世の祖宗慧上人の代に門跡號を勅許せられたるもの、本尊は一光三尊佛の金像にして、現に今上皇帝も參拜あらせられたりしといふ。全國に末寺六百二十五寺を有す。この一身田の町は殆どこの寺の爲に繁昌しつゝありと言いても差支なかるべく、街道は兩側に旅店飲食店を並べつゝ、直ちに寺の山門に通じ、山門の中に偉大なる本堂あり。報恩講、講佛會、彼岸會には、信徒の參詣者陸續として踵を絕たず。町の東、街道に遊廓あり。

汽車より左を仰げば、經ケ嶽の奇峯翠色を送り來りて、白雲翠嵐宛然畫くが如し。これより津市へ一里弱。

津停車場は津市の北部にあり。これより津の中央繁華地に至るに、約

二十二三町もあるべし。

津市は伊勢の國第一の都會、舊時は藤堂氏の居城ありし所、今は三重縣ほど、伊勢は津て持つと、古來人口に膾炙せられし廳を首とし、地方裁判所、區裁判所、聯隊區司令部、小林區署、稅務署警察署、郵便電信局、測候所、市役所等あり。東は阿漕浦に臨み、贄崎港を擁し、岩田川は市中を横ぎり、市街は東西一里、南北一里半に連なり。戸數約六千二百、人口約三萬三千を有し、舊城趾は市の南方に在り。本丸西丸は唯だ石壘のみを存するも、東丸は老樹繁茂し、繞らすに濠を以てし、濠中蓮多く、花時の眺望甚だ美なり。城門の北なるを京口門、西なるを伊賀口門、南を中島門と稱す。各門の域内を丸の内と稱す。中に高山神社あり、藩祖藤堂高虎を祭る。

津市の公園　元藤堂氏の別墅にて、停車場の西約三丁にあり、安濃川

に臨める天然の丘陵にて、園内に老樹多く、泉水を潴し、櫻及躑躅を雜へ植え、花候最も佳なり。丘の頂上なる傘の臺に上れば、伊勢海に往來する眞帆片帆の風景を一望の下に集む、また舊時藤堂氏の菩提所たりし觀音寺は市街の中央大門町に在り。眞言宗にて如意輪觀音を本尊とし、市内最も賑やかなる所、各種の興行物、茶店等、軒を連ねて日夜客を招く四天王寺は曹洞宗にて、市内榮町に在り、聖德太子の開基、大日如來を本尊とし、寺内に織田信長の母、土田氏の墓あり。其他に西來寺、上宮寺、彰見寺、天然寺、長樂寺、佛光寺等、皆由緒ある名刹なり。

物産は伊勢縞木綿を最とし、一ケ年の産額百萬反に達す。其他阿漕燒の陶器茄子、團扇、津絞子、竹細工等あり。觀音寺の境内に市立商品陳列館ありて、此等の物産を陳列す。而して所謂「伊勢は津て持つ」なる船舶集散の要港は、市内を横斷して流るゝ岩田川の口にあり。登崎港といふ。汽船は斷えず出入す。其の附近各港への船賃は、四日市港へ十五錢、神社港へ十錢、尾鷲港へ一圓鳥羽港へ二十錢、木ノ本港へ一圓廿五錢等なり。旅館には入江町の大觀亭、

極樂町の聽潮館、北町の魚爲等は、料理屋を兼ぬ。旅館を專らとするは、東町及停車場前の若六本支店、停車場前の松阪屋、中ノ番町の林屋、國分屋、榮町の鍋屋、萬町の櫻水樓等なり。料理を專らとするは西町の内喜亭、海水浴には阿漕浦の千鳥館、安濃浦の朝日館、贄崎のことぶき等、就て浴すべく宿泊すべし。遊廓は贄崎と藤枝との兩所にあり。津停車場より各地へ距離及人力車賃、公園へ八丁(八錢)、縣廳へ八丁(八錢)、觀音寺へ十八丁(十錢)、丸の内へ十七丁(十錢)、阿漕浦へ三十三丁(二十錢)、贄崎へ三十一丁(二十錢)なり。

●贄崎の海岸は稍〻風景のすぐれたる所なり。海岸の特相は伊勢内海他に見たるところに異らされど、前に知多半島を見、それより篠島の一青螺を隔てゝ渥美半島、ことに伊良湖の絶岬の宛然海中の孤島のごとくなるを見る、一奇觀なり。之に加ふるに、伊勢海の右をめぐれる連山は弓弦のごとき灣に沿うて東南を指し、志摩鳥羽附近の島嶼の相羅列せるさま、そゞろに遊客の心を惹くに足れり。岬の一端に小燈臺あり。臺下に二三の芦簾張あり。旅客の休憩するに任かす。

贄崎の遊廓も松原近くにありて、風情に富めり。此地に阿漕燒と稱する陶器あり。其製法は古雅にして趣味に富めり。惜むべし、先年罹元倒產の災に遂へり。

阿漕は津市の一部にして、停車場あり。津市南部に至る人は前の驛よりも此車場にて下車するをよしとす。別格官幣社にて、南朝の忠臣結城宗廣を祀れり。宇八幡町に(停車場より二十五町)に結城神社あり。宗廣は南朝の振はざるを慨き、硯兵を奥州に擧げ、北畠顯信と共に延元三年八月後醍醐天皇を奉じ伊勢國大湊を發し海路東下して遠州灘を過ぐるとき、途中颶風に遭ひ、宗廣は終に親王及顯信を失ひ、海上に漂ふこと七日伊勢の安濃津に漂着す。偶々病に罹り、終に癒えず、涙を呑て此地に歿すといふ。

阿漕に海水浴あり。千鳥館、魚庄、朝日館等あり。

阿漕より濠車は海岸地を走り、高茶屋、六軒などの諸驛を過ぐ。

●辛洲●海●水浴は高茶屋、六軒兩驛の間にありて、雲出川と矢野新川との三角洲にあり。風景明媚にして、青松白砂相掩映し、優遊一週日を銷するに足る。旅館三四あり。いづれも設備完全なり。高茶屋よりするも六軒よりするも里程一里に過ぎず。

六軒の次驛は松阪町なり、

●松阪町●は參宮街道最も繁華なる市街にして、人口一萬三千餘を有せり。伊勢木綿松阪木綿の主産地なり。街衢整正にして、富豪多し。日本有名の宮豪三井家の祖先も此地の出身なりといふ。

古城趾今公園たり。城は延元年間北畠氏の築きたるものといふ、公園に本居神社あり、本居宣長の國學に功あるは皆人の知るところ、かの山櫻の歌は人口に膾炙せり。其墓は町の西南山室山の嶺にあり。

旅店回春樓、山川ホテル、枠屋等。

徳和を經れば相可驛なり。相可町は甚だ繁華なる市街にあらざれども大和(五條に至る地)街道の分岐點に當るを以て重要なる地なり。

停車場より町まで三十町を隔てたり。北畠氏の故城趾も此地より至るべし。

相可驛を距りて南すれば、宮川の清流長く鐵橋(千四百三十五呎)を架して、朝熊の連山の翠微漸く前に近く、遂に瓦甍百千人屋櫛比せる宇治山

●田●町に達す。

●宇●治●山●田●町●は人口三萬一千餘を有する都會にして、舊時は內宮領に屬する宇治郷——外宮領に屬せる山田郷——を全く區別し、あいの山を境とせしが(今や其地形の區別依然として町は長き發達を爲せり)明治二十三年これを合せて宇治山田町といふ。神宮司廳、度會郡役所、區裁判所等あり。參宮の旅客を得意とせるを以て、旅館、飲食店、妓樓多し。

旅館は古市の油屋、麻吉、尾上町の藤屋、十文字屋、松島館、八日市場の興可樓、外宮前の神風館、宇仁館、高千穗館、一志久保の吸霞閣等。

虎尾山頂の五二會館は內外紳士の爲めに設けられたる宴會場且つ旅館にして、眺望絶佳なり。

料理店は興可樓、麻吉、吸霞の三旅館これを兼ぬるの他、新道の戸田屋、古市の吉村あり。

●豐●受●大●神●宮●は一に外宮と稱し、山田町の南端(停車場より遠からず)にあり。宮の區域廣濶にして幽邃を極む。主神は豐受太神にして瓊々杵尊

天兒屋命、天太玉命を配祀す。毎二十一年目毎に遷宮式を行はせらる。

皇太神宮は内宮と稱し、外宮と共に皇室の祖廟と爲し、天照皇太神を主とし、天手力雄命、萬豊秋津許姫を配す。外宮を去ること一里、宇治郷より五十鈴川の宇治橋を渡りたるところにある。

兩神宮參拜の順序を案内すれば、山田の停車場を下りて先づ外宮に向ふを便とすべし。停車場より月讀宮に參し、それより南に向へば、六七町にして外宮の表見張所に出づべし。而して旅客は其前に杉樹森々たる林影を見るならん。先づ一の華表橋をはたり、右方に樟の老樹を見、その華表前に至れば皇族下乘掲示あり。之を入りて進めば、右方に神樂殿、大廊授與所、玉串行事所等あり。宮城すべて八十一町、接續の神苑一萬五千餘歩、老杉森々として莹茸堀立ての社殿を蔽ひ、恭やしく御垣の外より窺へば、殿社は素朴にして建築、御柱の高サ一丈、廣サ一丈六尺、御屋根には千木鰹木を備へ、高欄には五色の玉を飾るのみ。一見瀟洒に、參拜者をして自ら敬念の禁ずる能はざらしむ。此御門口より出れば、此所より高倉山口に至る一帶の庭苑、茜時は大家櫛比して宮域を繞すの恐れあり。明治十九年中、土地の有志家神苑會を興して、人家を除き境域を正し、花木を植ゑ泉水を設け、靈境は更に神々しきを加ふ。

農業館は神苑會の事業として、神苑の正面

北側に國道を隔てゝ設立したるなり。

外宮の參拜了り、細長き山田の市中を過ぎ、古市町に軒を列ぬる幾多の旅館と、五二會商品陳列所等の前を過れば、間の山の小丘には、絲竹喧囂、種々の餘興を備へて通行の客を呼ぶ者軒を聯べ、古來お杉お玉と稱して、三味線を弄しつゝ客の投る錢を受る者も此所にあり。娼樓また軒を並べ世に伊勢音頭の流行を演じにて客を呼ぶもまた此所にあり。間の山の阪を過ぎ、宇治町と爲る。町の東端にあり。

宇治橋と云ひ、橋下に網受と稱して、金を乞ふ者多く、長竿の先に網を附け、客をして橋上より錢を投ぜしめ、盛く之を受く、一錢を失はず。また一名物なり。橋を渡れば內宮の宮域にして、橋側に一ノ華表あり。山田停車場より此所まで一里十七丁、人車賃二十五錢、別に馬車、自動車等あり。

參拜の徒は、皆この一ノ華表を入り五十鈴川の岸にて川水を掬し、盥漱を行ひ、更に二ノ華表の下を過ぎ、歩して辭蒼たる老杉天を蔽ふ間を進めば、道の左側に時雨館あり。元と說教の場だりしも、今は寶物陳列場と爲り、參拜者の請ふに任せ、拜觀を許さる。大廊授與所は、之に隣り、神樂殿はまた授與所に隣りて相聯ぶ。五丈殿、酒殿、由貴御倉、四丈殿、建築の素朴にして屋上に千木、鰹木を飾るは、總て外宮と同じく、唯だ千木の尖頭、外宮は外に開け、內宮は內に開くのみ。恭やしく神前に額つけば、正に是れ何事のおはますかはしられども、かたじけなさに涙こぼるゝと古人の言ひけんが如く、一種の感に打たれておのづから衣襟を正さしむ。

內宮外宮共に其建築は所謂「唯一神明造り」の式によれるものにて、上古以來多く

の變遷ありたれど白木造の撲古にして壯殿犯すべからざる形式を備へたるは依然たり。二十一年目毎に建築には、造神宮の工匠は總て古式の裝束を爲して事に從ふをつれとなすといへり。

世七八年の日露戰平和後先つ聯合艦隊參拜あり、尋て車駕親臨直接奉告の祭を行ひたるは未だ世人の平目に新たなるところなり。

朝熊山は伊勢志摩兩國の境に跨りたる名山にして、其の眺望のすぐれたる蓋しこの附近に冠たり。登路四條あれども、内宮より登るを最も容易なりとす。先づ二十町ほどにして楠部峠の眺望臺あり。山上の平地まで六十町なり。宮川の流域より伊勢海の大觀を一眸の下に集め、風景雄大なり。山の脊をたどること廿町地の一角に豆腐屋と稱せる大なる旅店あり。前に眺望所を設け、其眺矚の美なる、楠部峠と劣らず。(二見より登れは此處まで三十町ばかり、路は板を竪てたるがごとく險峻なり)これより頂上まで十二町、同じく山の脊にて路はさほど嶮ならず。山上に金剛證寺あり。本尊虛空藏は空海の作なりと傳ふ。此の山上より望めば、前に志磨伊勢の沿岸

を眺め頗る壯觀なり。寺の門前には人家相接し旅館多し。又萬金丹の本舗野間氏なり。

朝熊山の萬金丹は本邦有名なる藥劑にして、これを發賣するもの多く、其足跡東奥の僻陬に及ぶと聞く。

これより山の南西に下れば、志摩國磯部に出づ。山路にして車を通ぜず。此山中を氣候清涼にて、轉地療養または低廉なる避暑に適す。

二見浦は伊勢參宮者の必ず一訪すべき地なり。其地は宇治山田町の東北二里に位し、風景明媚なり。其道路一は内宮より五十鈴川に添ひ汐合川を渡るものにして、間道なれど捷路たり。一は山田町より川崎町を過ぐるものの今、此路に添うて電車を通ず。又朝熊山よりすれば、山脊豆腐屋の角より下り、山麓なる朝熊村に出て、地に鎮座せる朝熊神社に詣で、それより一里にして至る。二見の地は青松白沙の中にありて、海水浴の旅館軒をつらね、路は海岸を縫ひて頃刻にして

海水浴場のある附近を茶屋町といひ、旅館、茶店、貝細工を賣る家軒をつらねたり。旅館には清渚亭、太陽館等あり。又、神苑會の別墅なる賓日館あり。

岩の大なるは高二丈九尺、小なるは一丈餘、相並んで海上に立ち、これを隔てゝ遠く志摩の群小島の碧瑠璃上に散點するを見る。二岩に大注連縄を張り、岩肩に小華表を立てたるさま、寫眞にて見たるごとし。朝暾を見るの名所として名高きは既に人の知る所なり。夕照を見るにも亦よし。此處より三河の蒲郡に通ずる渠船ありたれど、今はありや否や。

●神●社●港●は宮川汐合川の三角洲の河口にあり。伊勢海岸に於ける有數なる船着にして、伊勢内海ことに衣浦船行の發着所として有名なり。二見より後戻りして一里餘。

●大●淡●港●は神社港より十數町なり。古來航海と造船とを以て名高く今猶造船所あり。往時は京阪地方より東國に赴く舟路の要衝に當りたるものゝ如く、かの北畠親房が踐阼親王を奉しての遠征も此地に帆を聞きたるなり。今數個の造船所の他に造船徒弟學校の設あり。

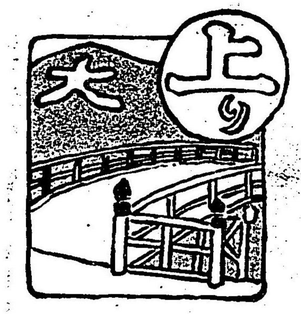
●志●摩●の●諸●勝●

志摩國は伊勢の東端に位し、日本國中の小國なり。此北に

欠

MISSING

26/8/40



ふくせいを許さず

著作者　田山錄彌
發行者　東京市麻布區狸穴二丁目九番地　服部國太郎
印刷者　東京市麻布區西鶴町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市麻布區西鶴町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區銀座二丁目　服部書店
賣捌所　東京市日本橋區通一丁目　大倉書店

明治三十九年八月三日印刷
明治三十九年八月六日發行

定價金九拾五錢

30
441

30
441

022774-000-8

30-441

日本新漫遊案内

田山　花袋／著

M39

ADB-0570

14.1.20